

モノを読み解くための覚書

調査票（カルテ）から考えるコンテンツ・コンテクストと定性・定量

小島 浩之

はじめに

本稿に与えられた当初の課題は、洋書の修理痕の調査で用いた調査票（カルテ）について解説することであった。このカルテは、一橋大学社会科学古典資料センターの保存カルテ¹⁾を参考に素案を作成し、素案に沿った試験的な調査を何度か繰り返しつつ練り上げた。最初に一橋大学で、次に東京大学でこのカルテを用いて調査を行ったが、両者は調査対象やその修理履歴が異なるため、調査項目を調整している。こういった調査の経緯や実際の調査内容、さらには調査結果の分析は、床井啓太郎、森脇優紀両氏の論考を参照いただきたい²⁾。

冒頭で述べたように、本稿は「洋書修理痕調査カルテ」の概要を説明するものではあるが、カルテの構造は調査の目的や内容を切り離しては存在し得ない。ただし、目的や内容は床井論文や森脇論文で縦横に論じられるはずである。このため、いらぬ重複を避けると、本稿はカルテの見本を提示して、項目を説明するだけのものとなってしまう。それだけでは、あまりにも能がないので、本稿では「洋書修理痕調査カルテ」の概要を示すとともに、その背景にあるモノ資料を読み解くための考え方について、歴史研究の立場から筆者なりに分析したところを覚書として記す。

1. 「洋書修理痕調査カルテ」の概要

1-1 調査の前提

まずは今回の調査で使用した「洋書修理痕調査カルテ」のうち、東京大学で使用したカルテを例

にして、その考え方と方法論についてまとめる。

今回の調査対象は、東京大学経済学図書館所蔵アダム・スミス文庫の303冊である。このコレクションは経済学の祖とされるアダム・スミスの旧蔵書からなり、今から100年前の1920年に新渡戸稲造により寄贈された。東京大学の教職員の尽力によって、関東大震災や第二次世界大戦の被害を免れたものの、その痛みは激しく、昭和30(1955)年1月から同32(1957)年9月にかけて大修理が行われた。この時修理を担当したのは、当時、諸製本の第一人者と言われた製本家・服部政祐であった。

服部はスミス文庫の修復を担当する直前に、一橋大学メンガー文庫の修復を行っている。この時の経緯を記した『一橋大学附属図書館史』では川崎操が「服部政祐老人」と記している³⁾。また東京大学に残る修理記録には、服部が「この仕事を自分の墓碑に〔彫〕るといつて打込」んだ、「老齡の服部氏の健康の衰が目立ち始め、殊に視力の衰退が非常に懸念された」などの文言が残る⁴⁾。昭和29(1954)年当時、服部のことを老人と記した川崎は、1904年の生まれで50歳前後であることから、その彼に老人と呼ばれた服部は60歳を超えていたであろう。川崎はナカバヤシ創業者の中林安右衛門のことも服部と同様に「老人」と書いている⁵⁾。中林は明治26(1893)年の生まれであるから⁶⁾、昭和29年は61歳である。服部の年齢もこれと同程度以上であることは間違いなく、明治26年以前の生まれと考えられる。当時の平均余命は60歳前後であるから⁷⁾、60歳を超えた服

部や中林は、十分に老齡の域に達していた。

この推測が正しいならば、服部は明治期に製本技術を取得したほぼ最後の世代に当たる。このため、服部の修理の痕跡を分析することで、W.F.パーソンにはじまる日本の洋式製本の技術的祖型的一端を見出せる可能性がある。

こういった研究意識と仮説に基づいてはじめた調査ではあるものの、何をどこまで観察して記録をとるべきかは試行錯誤の連続であった。途中で項目の追加・変更が生じ、そのつど該当項目について最初からデータを採りなおす作業となった。それでもなんとか最後までデータを採取できたのは、調査担当者である篠田飛鳥氏のおかげである。この場を借りて感謝申し上げたい。

1-2 カルテの構造

東京大学で用いたカルテを次頁に示す(図1)。またこれに先行する一橋大学の調査で使用したカルテは床井論文を参照されたい。一橋大学の調査が複数の製本師の仕事を分別する必要があったのに対して、東京大学の場合は、服部だけの特徴を追究するものであった。このため、両者の原則は同じであるが、細部で異なっていることをあらかじめお断りしておく。

カルテは、①表紙・②背・③とじ・④見返し・⑤ノド・⑥中身(本文紙)の六つの調査個所を、「現状」と「補修個所とその劣化」の二つの調査大項目から観察するようになっている。

「現状」には、現時点での製本構造と使用素材について記録する。調査項目中の「(製本)構造」は、それぞれの観察個所に使われている技術・技法に関する判断を記録する。これらはいずれも物理構造から判断できるものである。また同じく「材料」は当該個所を構成する素材について記録する。

一方の「補修個所とその劣化」には、修理・補修の痕跡を観察して記録するだけでなく、修理部

分の現在の劣化状況についても記録できるようになっている。この調査項目は、基にした一橋大学の保存カルテにはなく、本調査にオリジナルな部分である。

「現状」が見た目で判断できる物理構造や使用素材からの判断であるのに対して、「補修個所とその劣化」は、痕跡を探って記録するものである。必然的に調査者には、製本に対する十分な技術的知識と鑑識眼がなければならない。このため、現状では複数人による大規模な調査は不可能であり、こういった調査をどこまで一般化できるかは今後の課題である。

なお、補修個所について現状の劣化状況まで調査したのは、今後のスミス文庫の保存方針の策定に役立つからというだけではない。現状の劣化状態を確認することで、修復時の技術的要素や使用した材料を推定する手がかりが得られるからである。

前述したように、このカルテは、一橋大学社会科学古典資料センターの保存カルテを土台としている。ただし、今回の調査では「⑤ノド」を調査個所として独立させた点が特筆されよう(保存カルテではノドは見返しに含まれている)。

ここで言うノドとは、本文紙のノドではなく表紙と本体の接続部分、いわゆるヒンジ部分のことを指す。製本においてヒンジ部分は、構造的に最も負荷がかかる部分であり、修復も多いと予想される。現にスミス文庫の修復記録においては、少なくともいずれかの表紙がとれたり、失われたりしているものが合わせて93点にのぼっている⁸⁾。表紙の接続方法は綴じ糸が活着しているかどうかによって変わる。綴じ糸が切れていれば装幀全体をやり直すしかないが、綴じ糸が活着している場合、布などで補強して繋ぐこともできる。

このようにヒンジ(ノド)部分は、修理の頻度が高いので、修理痕の調査において特徴をとらえやすい部分であると予想された。このため、十分

作業者		作業日時	
請求記号 アダムスミス:			
修復者 服部 その他			
修復日			
修復者印 スタンプ / 箔押し / その他() / なし			
サイズ		H	W T
		現状	
		構造	材料
表紙 補修 あり / なし / わからない	とじつけ	総 / 半 / 半角	
	くるみ	タンニン革 / ベラム / トーイング	
あり / なし / わからない	リンプ	布	
	その他() わからない	単色紙 / マーブル紙 / その他の装飾紙	
	改装前の構造()	その他()	
	芯材:あり/なし		
補修箇所とその劣化			
表装全体交換 表装全体交換(旧表装貼り付け) 旧表装:良好 / 劣化 表装背部分交換(旧背表紙貼り付け) 表装部分修理(構造・簡易) 背 / のど / 表紙 / 角 表紙反り あり / なし 材料:革(補彩:あり / なし) 紙(補彩:あり / なし)			
背 補修 あり / なし / わからない	穴あり / 穴無し 芯材:あり / なし		クータ使用 あり / なし / わからない
とじ 補修 あり / なし / わからない	中とじ	平とじ	支持体 麻ひも / 革ひも / 布テープ / 皮テープ / 革テープ その他() わからない
	背バンドとじ かがりとじ テープとじ 支持体なし ステーブラー 仮りとじ その他() わからない	打ち抜きとじ からげとじ ミシンとじ ステーブラー その他() わからない	
支持体交換 あり / なし / わからない			
綴じなおし:すべて / 部分			
見返し 補修 あり / なし / わからない	とじ 貼り 巻き 複合型 わからない	洋紙 無着色 着色 マーブル紙 その他の装飾紙 和紙	オリジナル使用 すべて交換 部分的に交換 表:効き紙 / 遊び紙 裏:効き紙 / 遊び紙 表紙補修材料による変色 あり / なし
のど 補修 あり / なし / わからない	あり / なし	布 紙 その他()	
中身	折丁 / ペラ	原料:ポロ / パルプ / わからない 性状:すの目あり / なし :無着色 / 着色	

特記事項	
小口	オリジナル / 補修後着色 / わからない 色:金 / マーブル / ベタ / パラ / なし
花布	オリジナル / 交換 / なし
留めひも	オリジナル / 交換 / なし
その他	
裁断あり / なし	
交換後の色:黄赤 / 青白 / その他()	

図1 洋書修理痕調査カルテ

に注意を払って観察すべき部分であると判断し、表紙とは分離して別個の調査個所とした。

2. モノ資料の観察と構造化

2-1 「洋書修理痕調査カルテ」から考える

今回の調査カルテ中、「現状」の調査は、対象資料の現状を観察して、その物理的な形態や構造、それらを構成する素材について記録する部分である。具体的には図1のカルテを見ればわかるように、素材の有無を判断するか、あらかじめ用意された選択肢から最も適切なものを選ぶ形になっている。選択肢は、製本技術上すでに定義されている用語に統一してあるので、基本的な知識を有している者であれば、誰が調査を行ってもその判断に大きな違いはないはずである。

このため、その他を選択した場合を除き、得られた結果は数値に置き換えて処理し分析することが可能である。この意味で「現状」の調査は汎用的な調査であり、原則として定量化して分析することに意味のあるデータが得られると言える。

判断基準が明確なので、同じ調査を複数の調査員により全国規模で実施しても、比較検討し得る意味あるデータを得られるであろう。これは、基にした一橋大学の「保存カルテ」が汎用的に設計されていた証でもある。

一方で、「補修個所とその劣化」の調査は、選択肢を基本としてはいるものの、修理痕跡という物理的・視覚的に明白とは限らない部分の判断であり、調査者の鑑識眼に大きく依存する。このため、一見すると「現状」と同じように定量的に処理できるデータではあるものの、両者は本質的に異なるものとして認識すべきである。

2-2 古文書料紙調査から考える

筆者は、こういったデータの質的差異を古文書や古典籍における料紙の非破壊調査でも感じたことがある。この調査方法について、筆者は以前

に、調査者の感覚機能により観察し（①外形・表面観察）、法量・重量・厚みなど紙の物理量を測った上で（②形状測定）、顕微鏡やカメラなどの各種光学機器を利用した観察・測定データ（③光学観察・測定）を加味して、定量的に分析する手法だと説明したことがある⁹⁾。

料紙の調査手法は、日本古文書学や日本中世史、文化財保存科学などの研究者により深められてきた。その背景には、非破壊による調査法と、経験則ではない、第三者検証可能なデータに立脚した料紙論の確立への強い志向があった。

この調査では、紙の製造工程での様々な痕跡をも調査し調査票に記録する¹⁰⁾。たとえば抄紙の際に使用された簀^すや、乾燥時に貼られた板や壁、なぞった刷毛の痕跡を調査する。文書の内容には直接関わらない、製造時の技術的痕跡の追究という点で、「洋書修理痕」の調査と似ているであろう。

具体的な調査項目としては、技術的痕跡についての有無・測定・見え方の確認・紙の表裏との対応関係などがある。測定とは、簀^すの痕跡（簀目）では1寸あたりの本数を数えたり、簀を編んでいる糸痕の間隔（糸目幅）を測ったりというようなものがある。これらは数値で明確に示される定量データで、基本的に誰が測定しても同じになるはずである。ただ、他の項目は調査者の鑑識眼に大きく依存する部分であり、調査結果を定量化することは可能であるものの、簀目の数や糸目幅などの定量データとは本質的に同じとは言い難いのではないか。調査に参加するたびに、このような疑問は増大するばかりである。

2-3 「田窪/矢野モデル」からの示唆

この筆者の疑問を解決する糸口になるのではないかと考えられるのが、いわゆる「田窪/矢野モデル」¹¹⁾である。これは矢野正隆が、博物館・図書館・文書館の相違をメディアへのアクセスとメディアの構造から分析し、提示したものである¹²⁾。

表 1 は基本的には矢野論文からの引用ではあるものの、説明の都合から筆者が少し順序を入れ替えた部分がある。

表 1 博物館・図書館・文書館メディアの相違

	発信者の想定する受信者の範囲	キャリアー中のメッセージ部分
博物館メディア	限定 / 非限定	境界なし
図書館メディア	非限定	境界あり
文書館メディア	限定	境界あり

ところで、筆者はメディアという言葉の意味するところを正確に理解しているとは言い難い。矢野の議論を読む限りでは、メディアとは「情報を媒介するものの総体」という意味だと考えられる¹³⁾。以下、矢野論文の内容に関わる部分は本稿でもメディアとするが、上記のような認識で差し支えないならば、資料と読み替えてもよいだろう。

矢野はメディアへのアクセスの点において、「発信-受信関係」を軸に整理する。

- 図書館メディアは不特定多数に向けて発信されたものであるから、書き手や出版社などの発信者の想定する受信者の範囲には原則として制限がない¹⁴⁾。
- 文書館メディアは、本来組織の内部という限定されたメンバーに向けて発信されたものであるから、受信者の範囲は限定される。
- 博物館メディアは資料によって限定、非限定の双方に分かれる。

こういった「発信-受信」関係は、古文書の研究において重視される要素である。古文書学では、この関係が文書の様式や機能はもちろんのこと、文書の性質に影響を及ぼすと考えられている。矢野の議論の特徴はこの「発信-受信」関係をメディア全般に応用し、「発信者-受信者」という相互関係ではなく、どういう範囲が受信者たり得るかという点に着目した部分にある。

次にメディアの構造という点では、田窪直規の

「メッセージ-キャリアーモデル」¹⁵⁾を発展させている。これは、メディアをモノから読み取れる情報（メッセージ）と、その情報を載せるモノ（キャリアー）の二元論として捉えるモデルである。

図書館メディアと文書館メディアは文字情報とその記録媒体の組み合わせから成り立っていることが多いから、墨と木、インクと紙のようにメッセージとキャリアーの境界は比較的明瞭である。これに対して博物館メディアは、これが不分明なものが多いという。確かに、文字情報がなく、形や文様などの意匠がメッセージ性を有するようなもの、たとえば縄文土器は、メッセージとキャリアーは分別しようがない。

矢野は前掲表 1 のように、「発信-受信」関係と、「メッセージ-キャリアーモデル」を組み合わせ、所蔵機関の種別による相違を説明する。情報の受け手の範囲に着目し、情報とその器の分離・非分離に即して説明するのは、このモデルが資料保存のあり方を見据えたものだからである¹⁶⁾。この意味で、「田窪/矢野モデル」は資料のモノとしての側面に特化しているものの、資料を管理する側からの議論ということになる。これを如実に示すのが、博物館メディア、図書館メディア、文書館メディアといった資料的特性ではなく、博物館メディア、図書館メディア、文書館メディアという所蔵機関に基づいてメディアを区分している点である。

他方、このモデルは資料の伝来を考究するために有効な視座となる。書籍の伝来系統を例にとれば、新たな鈔写や刊刻は発信者が変化することで、メッセージが新しいキャリアーに移されたと考えられることができる。メッセージがどのように新しいキャリアーに移されたかを追うことで、新たな発信者のメッセージを読み解けるのだということになる。

ただし、このモデルで提示されるメッセージには、先述のように文字情報だけでなく、意匠などの非文字情報も含まれる点、文字情報は内容（コ

ンテンツ)であり、モノから導き出される非文字情報は文脈・状況(コンテキスト)に属するものである点には、注意しなければならない。また、コンテンツはキャリアと切り離すことはできるが、コンテキストはキャリアと切り離すことはできない。

先に提示した「洋書修理痕調査カルテ」や「古文書料紙調査票」において、筆者は、定量化は可能であるものの、データの採録が調査者の鑑識眼に大きく依存するものについて、単純な計測値等との質的差異の問題を取り上げた。

この違いについて、矢野の提示するモデルに則して説明を加えるならば、計測値や形態区分のデータは、キャリアの物理的特性に着目したものであり、調査者の鑑識眼に大きく依存するデータは、キャリアから調査者が受け取ったコンテキストに属するメッセージだということになる。

3. 書籍を利用した研究についての考察

3-1 書籍を利用した研究の四類型

ここまでの議論を書籍を利用する研究一般に広げて考えてみたい。書籍を利用する研究は、研究対象からすれば内容(コンテンツ)研究と文脈・状況(コンテキスト)研究に大別される。前者は歴史学や文学のように、内容情報の分析を主眼とする研究、後者は書誌学や古文書学のようにモノとしての分析を中心とする研究である。また分析手法からは、定性的研究(質的研究)と定量的研究(数量的研究)に区別される。すなわち書籍を利用した研究は研究対象と分析手法から、

- ① 定性分析によるコンテンツ研究
- ② 定量分析によるコンテンツ研究
- ③ 定性分析によるコンテキスト研究
- ④ 定量分析によるコンテキスト研究

の四種に類別されよう¹⁷⁾。①には一般的な資料読解に基づく歴史や文学の研究が、②にはテキストのデジタル化が進んだことにより、テキストマイ

ニング等の手法で実践されるようになった比較的新しい手法の研究が該当する¹⁸⁾。③は後述するように一般的な書誌学や古文書学の研究手法、④は本稿で採り上げた洋書修理痕調査や料紙調査などに基く研究が該当する。

このほか、アナル学派にはじまるような、印刷や出版の統計的な解析から社会における書物の意味を考究する研究や、図書館における書物の利用動向に関する計量的な分析、さらには計量書誌学なども④に含まれよう。

なお筆者は、書物を利用した全ての研究がこの類型と一対一対応になると述べているわけではない。研究内容によってはこの類型の複数に該当する場合もある。たとえば近年盛んになってきたデジタルヒューマニティーズの研究などは、②と④の一部が融合したものといえるだろう。

書誌学や古文書学は、書籍や文書に関するコンテキスト研究、すなわちこれらをモノとして読み解く研究分野である。書籍や古文書は一定の物理量を持っているから、モノ研究だとすれば、定量的な分析を得意としそうなものだが、実際はそうでもない。③の定性分析によるコンテキスト研究が主流であって、④の定量分析によるコンテキスト研究から書籍の本質に迫ろうという試みは多くはない¹⁹⁾。そればかりか、伝統的な書誌学や古文書学では、③と④の相違すら見過ごされているように思われてならない。

3-2 書誌情報の特性

書誌学は、図書のすべてを科学的に扱う学問である。『図書館情報学用語辞典』第4版によれば、一般に分析書誌学(批判)と体系書誌学(列挙)とに大別される。前者は、個々の図書を正確に識別し、記述すること、いいかえれば、原本と異本の違いなどを詳細、厳密に研究することを目的とする。後者は、個々の図書について情報を収集し、それぞれを的確に識別

できるように記述し、論理的に整理して、リスト化すること、およびその作成法の研究である²⁰⁾。

という。ここで成果としてリスト化されたものが図書館目録に見られるような書誌記述のはずである。

TR: 歴史學研究法 / 今井登志喜著||レキシ
ガク ケンキュウホウ

PUB: 東京 : 東京大学出版会, 1953.4

PHYS: 148p ; 17cm

SH: NDL SH: 歴史学 -- 研究・指導

SH: NDL SH: 歴史学 -- 方法論

CLS: NDC8:201.16

ここに掲げたのは、大学図書館における一般的な書誌データの一部である。書誌記述は複数の項目に分かれており、TR はタイトルと責任表示(著者・編者など)、PUB は出版事項、PHYS は形態に関する事項、SH は資料の主題、CLS は資料の分類を、それぞれ意味している。このうち、TR と SH は文字による情報、PHYS と CLS は数字による情報であり、PUB は両者が混在している。

数字による情報のうち PHYS は、頁数や本の大きさという本の物理的・形態的側面の一端を数値で表現したものであって、定量データとなり得る。ただし、図書館目録の書誌における頁数は、本の記載通りに記録されるため、本文の前後にノンブルの打たれていない頁が存在しても書誌記述には明示されない。頁数は、使用されている紙の量を判断する物理量の指標になり得る。しかし、数量としての正確性を欠いた図書館の書誌記述では、この指標として不適である。このように、文字の記録を優先し、本の物理的側面を捨象している点からは、図書館の書誌記述における数量は、物理情報ではなく文字情報から得ることを基本としていることがわかる。

一方の本の大きさは、計測値であり、やはり定量データとなり得る。しかし、縦の長さを小数点

以下切り上げで記録する原則のため、縦の長さが正確な数値ではないばかりか、横の長さや厚みは記録されないのである。

このように、図書館の目録に記載された数量データは、物理量としては不正確であって、参考値にしかなり得ない。このため、これらの情報を使用した定量分析によるコンテキスト研究にはおのずと限界がある。何故このようなことになっているかと言えば、図書館の書誌情報は、蔵書管理のために存在するからにほかならない。あくまで資料の管理者の立場から作られたデータなのである。

図書館の書誌情報は、できる限り採録者個人の判断が不要となり、かつ誰が見ても現物と照合できるデータとなることを目指して標準化されている。頁数の記録方法がノンブルの表記を原則とするのはこれに基づく。また、大きさは入れるべき本棚の大きさを判断するために必要な情報という位置づけのため、縦方向の長さで小数点以下を切り上げて記録すれば十分なのである。

他方、コンテキスト研究においては頁数と、縦横の長さや厚みが正確な数値であるに越したことはない。2冊の同名資料が、物理量のわずかな差から別物であることが明らかとなり、歴史上の新事実が見いだされることも珍しくはない。要は、図書館員とコンテキスト研究者では、モノを観察して得たい情報のレベルが異なっているのである。ここから、得るべきデータのレベルは、目的に左右されることがわかる。管理のためかつ万人に提供するための図書館の書誌情報と、個別具体的なコンテキスト研究のために必要な書誌情報は異なって当然なのである。

この点を敷衍して考えると、研究者は図書館目録をはじめとして、他人の手による書誌データを安易に信用してはいけないこと、自身が採録したデータを利用するような研究においては、データ採録の目的と方法を明示しなければ、第三者検証

に役立たないばかりか、研究に有用な基礎データとしても意味をなさないこと、という自明の理にたどり着く。

また、書誌情報中の SH や CLS は本の内容を端的な言葉や数値（この場合は主題を数値化したもの）で表現した部分である。いずれも文字で記された内容から抽出されたデータであるものの、資料の文字情報を分析した上で、SH は言語化、CLS は数値化している。「NDC8:201.16」というのは『日本十進分類法』第 8 版の分類中、201.16（史学方法論）にあたることを意味する。つまり 201.16 は数量データのように見えるが、実のところ「史学方法論」という言語による定性情報と相互変換可能なものなのである。

このように見ると、図書館の書誌情報は、文字で明示された定性データを中心に構成されており、数値も文字情報（定性情報）に基づいたり、相互に変換可能なものなのである。

以上からすれば、図書館目録の書誌情報は、モノを読み解いて得られたデータというより、モノに記される文字情報から導かれた定性データを基本としていると言えよう。

筆者は書誌学者が研究の上で作成した書誌と、図書館における管理のための書誌を同一視するつもりは毛頭ない。しかし、たとえば西洋古典籍特有の記述書誌学であっても、印刷されている情報こそが第一義的な情報となっていることは動かし難い事実であり²¹⁾、日本の書誌学も当初は書史学と記された²²⁾ことからわかるように、書誌学の主流は定性分析によるコンテキスト研究なのである。

4. 研究行為としてのモノの読み解き

次に視点を変えて、歴史研究の立場からモノの読み解きについて考えてみたい。

そもそも「史」の文字は、筆を握る手や記録する姿などを象ったものであるという。このため、

長い間、歴史学とは文字で記された記録を中心に分析を行う学問であるとされてきた。これを象徴するものが、史料・資料・試料という言葉の使い分けである。いずれも「シリョウ」と発音するものの、歴史研究では次のよう明確に区別してきた。

史料とは、歴史研究において、立論の直接的な典拠・根拠となる文字で書かれた内容、すなわち歴史研究上のエビデンスとなり得るものの総称である。これに対して資料とは、歴史研究上の間接的な典拠・根拠となり得る非文字の素材や材料を指す。また試料とは分析対象として提供される素材を指す。

ただ、試料は歴史学にとってなじみの薄い言葉であろう。試料は、分析試験を行うために採集され、それにより破壊・消費されることを前提としているから、現秩序の維持や資料保存を是とする歴史学の立場とは相反する存在にみえる。しかし、たとえば古文書や古典籍に使われている料紙や墨などが、破壊的に分析されてきたのも事実である²³⁾。歴史研究のための試料分析という行為の是非はともかく、歴史研究において史料や資料が試料ともなり得ることは否定できない。

さて、古文書学や書誌学、考古学など資料を中心に分析する学問や、分析化学など試料を分析する学問は、歴史学の補助学問と位置付けられてきた²⁴⁾。

このうち史料と資料の区分について、杉山正明は次のように述べる。

総じて近年、「モノ」にかかわる歴史研究が内外において以前とは段違いの水準と速度ですすみだした結果、かつてならただ文字そのものを眺めていた文献史料についても、急速に「モノ」研究の色合いを帯びだし、「史料」と「資料」という用語の境界は、かえって不鮮明になっている。文字化されたものも、非文字のものも、「モノ」としてとらえれば、どちらも「資料」であり、歴史を探る根拠とい

う点で眺めれば、いずれも「史料」である。
文字も「モノ」も、「読む」ことによって歴史
研究の材料となる点も、じつは変わらない²⁵⁾。

(下線は筆者による)

このように、「過去を考えるときの材料」、「過去への媒介物」²⁶⁾という点に着目すれば、史料と資料の区分は意味を失うとする杉山の指摘は傾聴に値する。この論文において杉山は「史料」を資料をも包含する表現として議論をすすめる。しかし、史の字の原義や、杉山論文では言及されていない史料の語の存在をも考慮すると、全体を包括するものとしては「資料」の語が適当であり、ひとまず以下のように区分してみたい。

- 資料: 歴史研究において、立論の直接的な典拠・根拠となり得るすべてのもののこと
- 史料: 資料のうちで文字情報を含むもの(文字資料)のこと
- 非文字資料: 資料のうちで文字情報を含まないもののこと
- 試料: 物質的な観点からの分析素材として利用される場合の資料のこと

杉山は下線部のように、文字もモノも読み取るものとして理解している。杉山の考える「モノを読む」とは、形態や構成素材といったモノの有体物としての側面や、モノの生産や使用に伴って付加された痕跡など、物理的に残された情報を収集・分類・分析し、帰納的に歴史的事実を捉えることを指すことのように²⁷⁾。

こういったモノを読み説く行為の基盤となるのは、おそらく対象資料の徹底的な観察であろう。その観察結果が文章表現や数値として変換され集積されることで、資料のモノとしての側面を言語や数量として理解できるのであり、これがモノを読み解くことだと、ひとまずは理解したい。これは、先に述べた「定性分析によるコンテキスト研究」と「定量分析によるコンテキスト研究」の融合に帰結すると言えないだろうか。

おわりに

本稿では「洋書修理痕調査カルテ」の概要を説明し、カルテ(調査票)を構造的に解析することを試みた。調査で得られたデータの多くは、詳しくみると、定量データもしくは定量化可能なデータであるものの、質的な差異が存在した。すなわち、計測値や形態区分などの単純データと、採録が調査者の鑑識眼に大きく依存するデータの二種が存在するのである。

この質的な差異を「田窪/矢野モデル」を利用することで説明しようと試みた。このモデルでは、メディアをモノから読み取れる情報(メッセージ)と、その情報を載せるモノ(キャリア)の二つにわけて考える。ここでメッセージについてよく見てみると、文字情報のほか意匠などの非文字情報もメッセージとなり得ることが示されている。ただし、文字情報は内容(コンテンツ)であり、モノから導き出される非文字情報は文脈・状況(コンテキスト)に属するものである。また、コンテンツはキャリアと切り離すことはできるが、コンテキストはキャリアと切り離すことはできない。これらを考慮すると「洋書修理痕調査カルテ」におけるデータの質的差異の問題は次のように説明される。

すなわち、計測値や形態区分のデータは、キャリアの物理的特性に着目したものであり、調査者の鑑識眼に大きく依存するデータはキャリアを通じてコンテキストに属するメッセージを受け取ったものということである。

本稿の後半では、こういった議論を書籍を利用する研究一般に敷衍することを試みた。書籍を利用する研究は、研究対象からすれば内容(コンテンツ)研究と文脈・状況(コンテキスト)研究に大別される。また分析手法からは、定性的研究と定量的研究に区別される。すなわち書籍を利用した研究は研究対象と分析手法から、以下の四類型に区分される。

- ① 定性分析によるコンテンツ研究
- ② 定量分析によるコンテンツ研究
- ③ 定性分析によるコンテクスト研究
- ④ 定量分析によるコンテクスト研究

この類型を考慮しつつ、伝統的な書誌学の限界と、歴史学における資料論でのモノの読み解き方の意味を考えてみた。

議論が多方面にわたり、また十分に先行研究を消化しきれていないことは承知しているが、ひとまず現段階における筆者の資料論の一端を示し

て、大方の批正を仰ぐものである。

【附記】 本稿は JSPS 科研費 JP16K12543、JP16H03351、JP19H03066、JP17H01834、JP18H00699 による調査活動から得た知見による研究成果である。

(こじま ひろゆき：東京大学大学院経済学研究科講師)

-
- 1) 床井啓太郎「社会科学古典資料センターにおける資料保存の取り組み」(増田勝彦・岡本幸治・床井啓太郎『西洋古典資料の組織的保存のために』改訂版、一橋大学社会科学古典資料センター、2010) 資料1を参照。
 - 2) 一橋大学での調査は床井啓太郎「1950年代の大学図書館における西洋古刊本の修復」を、東京大学における調査は森脇優紀「1950年代日本における西洋稀観書の修復技術とその方針：東京大学経済図書館所蔵「アダム・スミス文庫」を事例として」(いずれも『東京大学経済学部資料室年報』10、本特集記事)を参照のこと。
 - 3) 川崎操「図書館沿革概説稿」『一橋大学附属図書館史』一橋大学、1975、pp70-71
 - 4) 森脇優紀・福田名津子校注；小島浩之解題「『1950年代のアダム・スミス文庫に関する覚書』校注」『東京大学経済学部資料室年報』9、2019
 - 5) 前掲註3川崎「図書館沿革概説稿」同頁
 - 6) 『日本の創業者：近現代起業家人名辞典』日外アソシエーツ、2010、p289
 - 7) 三和良一・原朗『近現代日本経済史要覧』改訂補訂版(東京大学出版会、2010)によれば、男性の平均余命は1950年で59.57歳、1960年で65.32歳である。
 - 8) 両方の表紙がとれているもの(とれかけを含む)が32点、片方の表紙がとれているもの(とれかけを含む)が57点、両方の表紙の欠損が2点、片方の表紙の欠損が2点となっている(前掲註4森脇ほか「『1950年代のアダム・スミス文庫に関する覚書』校注」p21参照)。
 - 9) 天野真志・富善一敏・小島浩之「近世商家文書の料紙分析試論：武蔵国江戸日本橋白木屋大村家文書を例として」(『東京大学経済学部資料室年報』7、2017)。このほか、本多俊彦「文書料紙調査の観点と方法」(小島浩之編『東アジア古文書学の構築：現状と課題』東京大学経済学部資料室、2018)、高島晶彦「デジタル機器を利用した古文書料紙の分析」(『古文書研究』80、2015)なども参照。
 - 10) 古文書料紙調査の調査票(カルテに相当)については、前掲註9本多「文書料紙調査の観点と方法」を参照。
 - 11) ひとまず、藤岡洋「田窪/矢野モデルに基づくネットワーク情報資源の再考とデジタルデータベースの劣化」(『東洋文化研究所紀要』168、2015)の命名に従う。
 - 12) 矢野正隆「MLAにおけるメディアの特性とアクセスに関する試論：東京大学経済学部資料室所蔵資料から」『アーカイブズ学研究』20、2014
 - 13) 図書館情報学の研究者には、このメディアという言葉が好まれるようである。筆者はここからも図書館は情報を管理し提供する側だという、管理者としての意識の強さを感じる。後述のように「田窪/矢野モデル」も基本的には、情報を管理する側からのものであるのでメディアとするのが相応しいのかもしれない。
 - 14) ただし、図書館メディアは発信(発行)から時を経るにつれて、「開架図書→閉架図書→準貴重図書→貴重図書」などとしてアクセスが制限されていく特徴を有している。これは同じ紙媒体を中心とする文書館メディアが時の経過に応じて、「現用文書→非現用文書→歴史的公文書」というようにアクセスが緩められていく方向と正反対であり、非常に対称的だと考えられる。
 - 15) 田窪直規「情報メディアを捉える枠組：図書館メディア、博物館メディア、文書館メディア等、多様な情報メディアの統合的構造化記述のための」『Booklet』7、2001。
 - 16) 矢野正隆「メディアの保存に関する試論：デジタル・メディアを手掛かりとして」『情報の科学と技術』66-4、2016
 - 17) 本稿では、コンテンツじたいの情報が定性的なものか、定量的なものかという点は考慮していない。文学作品のように定性情報からコンテンツが成り立っているものと、統計データのようにコンテンツそのものが定量情報であるものについては、分けて考えるべきかもしれない。ただし、筆者は全てのコンテンツは定性情報にも定量情報にもなり得る側面を持っていると考えているので、この点は敢えて分離しないでおく。

- 18) ここから考えるに、この四類型は有体・無体という概念に拘束されないことがわかる。コンテキスト・コンテンツと定性・定量の議論において、本来は有体物・無体物という概念をも含めて議論しなければならないのかもしれないが、現段階では筆者の中でこの点の整理ができておらず、今後の課題としたい。
- 19) 定量分析によるコンテキスト研究の進展のためには、調査において何の数値をどのような方法で得ることが、どのような意味をもつのか、という点を明確にする必要がある。たとえば先に述べた古文書料紙調査の例で言えば、罫目の数を数えるのは、その相違が地域や時代、使用される紙原料の問題とリンクするからである。数値の持つ意味は、同じ条件のデータをできるだけ多く得ることで帰納的に見出される。この定量分析によるコンテキスト研究においては、様々な観点からできるだけ多くの定量データを得て、研究のために必要な数値には何があるのかを検討することが急務であろう。
- 20) 『図書館情報学用語事典』第4版、丸善出版、2013、p114
- 21) 記述書誌学については、高野彰『洋書の話』第2版（朗文堂、2014）を参照。ここで説明されているように、記述書誌学では、資料そのものの物理的な調査に基づく書誌の作成が要求される。しかしそれは、折記号やノンプル、その他の文字や記号などで表わされた情報を出発点として、それとの比較でなされるものである。この意味で書籍の定性情報に基づくコンテキスト研究であるといえる。
- 22) 長澤規矩也『古書のはなし：書誌学入門』再訂第3刷、富山房、1977（初版は1976年）、pp153-154
- 23) 料紙の化学分析の歴史については小島浩之「中国古文書料紙研究への視角」（湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版、2017）を参照。
- 24) 今井登志喜『歴史学研究法』（東京大学出版会、1953.4（初出は1935年））は、史料の取り扱いに必要な技術的知識、すわち史料学の補助学となり得るものを歴史学にとっての狭義の補助学科、独立的な関連諸科学を歴史学にとって広義の補助学科とする。これに基づけば、前者には書誌学や古文書学が、後者には考古学や分析化学が該当しよう。
- 25) 杉山正明「史料とはなにか」『岩波講座世界歴史』I「世界史へのアプローチ」岩波書店、1998.4、p213
- 26) 前掲註24 杉山「史料とはなにか」p214
- 27) 杉山が「モノを読む」代表例として、上原真人『瓦を読む』（講談社、1997）を採り上げ、「一見なんの変哲もなさそうな文字どおりの『瓦礫』が、周到で緻密な収集・分類・分析によって、いかに有用で雄弁な歴史再構成の手段となりうるかを示したものである。『モノ』から歴史情報を読み取るうえで、多くの人の手本とも参考ともなる見事な精華であった。『モノ』を主体にすえたアプローチは、おのずから技術史・産業史・生活史・文化史の様相を色濃く帯びる。」（前掲註24 杉山「史料とはなにか」pp219-220）と評している部分などから判断した。